

福岡県八女市忠見地区における電照ギクの産地形成について

小原 昶・松川時晴・菊本忠士

(福岡県園芸試験場)

OHARA, T., MATSUKAWA, T. and KIKUMOTO, T.

Chrysanthemum Growing controlled by Artificial Light in Tadami District, Fukuoka Prefecture

わが国の切花花きではギクの生産が最も多く33%を占めるが、電照ギクは昭和12年に愛知県で始まり、22年から営利栽培が行なわれるようになった。現在、最大の面積をもつ愛知県と香川および福岡の各県で三大産地を形成し、わが国の需給を左右している。

八女市では昭和28年に忠見地区に導入され、35年に共同出荷を始めて以来、一挙に大産地に成長し、40年には231,000m²余に達する発展をとげ、その整然たる共同出荷体制と品質は衆目を集めている。

I 八女における電照ギク産地の成立過程と

その背景

1. 八女市の地勢と概況

八女市は旧福岡島町を中心に忠見村はじめ、7カ村を合併した田園都市である。南に矢部川の清流、東北部は丘陵地帯を控えた平坦地で、面積3,920haのうち、水田37.5%、畑15.2%を有し、人口は約41,000人を擁する。気候は年平均温度15.7°C、雨量1,600~1,800mmと温暖であり、土壌は排水のよい肥沃な沖積土で、矢部川の豊富な水が活用できるなど、園芸地帯としての好適条件を備えている。

2. 花き栽培のおこりと電照ギクの発達過程

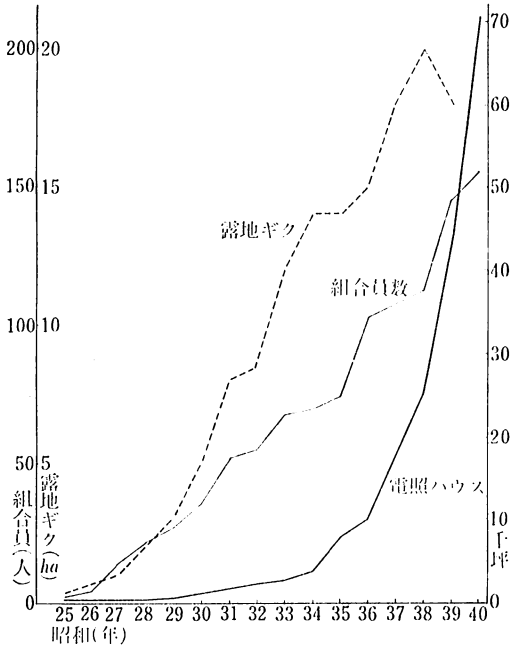
昭和2年、忠見村の上村茂氏がキュウリとナスを導入して以来、果菜の半促成栽培が盛んとなり、忠見トマトの産地として名声をはせたが、連作障害などから

経営転換を考えられてきた。たまたま昭和22年に栴野華氏が初めて露地ギクを栽培してその有利性を認め、ついで25年頃より上村氏、藤田恵氏がギクとカーネーションを栽培して忠見地区の経営転換の契機を作った。当初はそ業主体の輪作であつたが次第にギク主体に代つた。品種はデッセンパー・キングなどから、27年には雲仙が入つた。29年に導入の天ヶ原は八女の栽培に適したので現在90%以上を占め、天ヶ原の莽出し産地として発展した。電照は28年に始めたが技術、知識は未熟なため東光で全園が不開花となるなど苦しい経験を経た。一方、当時は本県の花きの需給力が低かつたため、新興産地のまとまつた出荷品は市況を大きく左右した。八女はその時代に成長し、個人出荷で市場の高値を狙い、各市場の価格の不安定を招いたため、生産者間に何らかの対策を切望する気運が生じた。そこで31年に八女市花き園芸組合を結成し、33年に始めて北九州に共同輸送して好評を得た。これに力を得て県外市場を対象に、さらに増産計画をたて、36年に始めて関西市場と打合せて、共同輸送を行なつたが、市場側は計画の実現を軽視したためか、渥美や小豆島の生産品との適切な調整がなされず関西の市況は暴落を招き、これが影響して全国的にギクの市況が混乱した。しかし次年度からは軌道にのり、また引き合いに応じて北海道に出荷を始めた。その間の市況の安

値には組合幹部が犠牲の出荷をつづけて市場の信用確保に努める一方、一部の業者による産地直接買いの対策など、苦闘を重ねた。役員は無報酬で、また組合員は役員を信頼して相互団結を固め、今日の基盤を築いた。

38年に第1次7カ年増殖計画をたてたが、組合員のすさまじい増反意欲と大量の新加入者のため、1年目にして大幅な変更を余儀なくされて遂に東京進出に賭切り、直ちに第2次10カ年増反計画をたてた。(第1、

第1図 八女市電照ギクの栽培概況



2図)

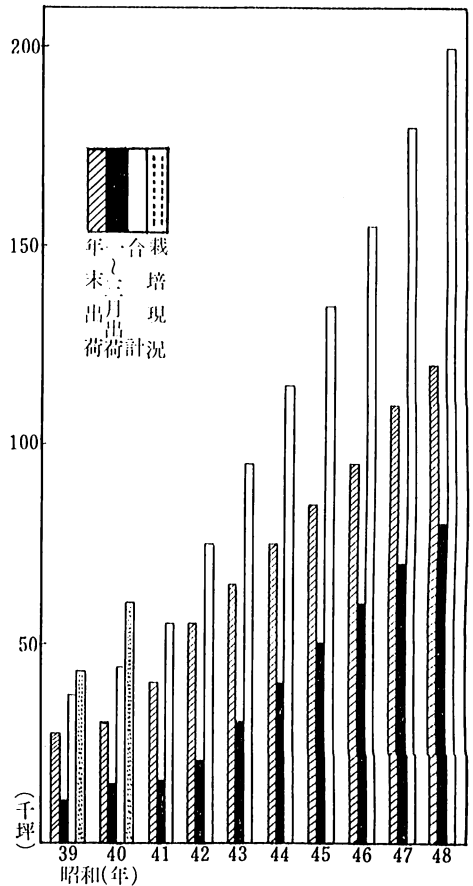
39年の東京進出は結果的には暖冬による買控えや経済不況などが影響し、全国的安値に終わった。これが組合員を刺激し、共同選花、共同販売の態勢を強化させるに至った。しかし生産計画は市場の受入れ量を重視しなくてはならず主産地間の過当競争は相互の自滅を招くので40年から愛知などと協議し、3回に亘る出荷調整の打合せを行なってきた。

3. 産地形成および共同販売を進展させた要因

a. 栽培技術公開による全体的技術の向上

一般に花き栽培者間では栽培技術の諸問題を先駆者が本当に細部までの指導や技術公開をさけ、全体的技術の向上を阻害している。しかし、八女市では果菜の共同出荷時代からの協調精神に加えて実篤な気風があり、技術公開、共同研究など地域全体の活動が今日の

第2図 八女市花き園芸組合の増反10カ年計画 (昭和39年案)



盛況をみた主因をなした。さらに品質向上で共販効果を高めるため試験場の助言に基き、八女電照ギクの栽培基準を作り、かつ忠実に実行したので39年度には栽培技術に大差が認められなくなるほど長足に進歩した。

b. 指導者の熱意と組合員の協調

青木保現組合長以下、役員達の斯業発展に対する熱意は異常なまで高く、常に組合員をリードしつつ、率先して共販の遂行に努め、また組合員は幹部を信頼して一致協力、産地銘柄の獲得に努めた(第1表)。40年度から産地間協議に基き、12月中に関東、関西ならびに北海道および九州の三地区に各300万本の出荷を計画しているが、共同選花基準に基づく共選は検査員を設けて厳正を期している。

第1表 八女市電照ギクの共同販売の概要 (忠見農協)

年次 (昭和)	共販率	共販 総額	共販箱数 12月11~2月	平均 価格	仕向け先	
						%
36	43	6,376	約2,000	6.50	関西	
37	45	11,269	1,020	248	12.32	
38	46	25,902	4,488	1,529	16.62	北海道
39	50	37,140	13,175	2,376	11.52	関東
40	55~100					

注 1. 37年度以前は500~600本入り木箱, 38年以降は1箱200本入りダンボール箱(107×35×25cm, Kライナ, 230のダブル)
2. 39年度から完全プール計算
3. 40年度から九州の各市場が共販品を受け入れるならば100%, また, 九州内が不可能としても65%の共販となる

II 八女における電照ギクの栽培と経営

1. 八女の電照ギクの特徴

立地条件と労力配分および生産費低減の見地から比

第2表 八女の簡易組立てハウスの資材費と償却費(330m²)

区 分	障 子	柱		合 撃母 タルキタルキ	屋 戸ケ 1寸角	棟木 竹	ネッ ト	ビニール		ポリエチレン 三重張り用	針金釘 その他	合 計
		長	柱					障子用	サイド用			
規 格	6×6.2尺	9.5尺	6.5尺	13尺	12尺	12尺	一式	3尺	185cm	185cm	185cm	
数 量	100枚 ひのきわく	26本	52	52	13	30	68本	200m	120m	300m		
価 格	430円	100	45	230	230	90	25	75	40	22		
額 額	43,000円	2,600	1,825	11,960	2,990	2,700	1,700	15,000	4,080	6,600	92,455円	
維 持 年 数	5年	3	3	3	3	2	2	2	2	2		
1年の償却費	8,600円	870	825	3,987	993	1,900	1,195	850	7,500	2,040	3,300	33,260円

注 ハウス建て労賃は3.3m²に約60円 木材などは尺貫法で表示した

第3表 八女電照ギクの栽培基準

作 業 項 目	作 業 日 程
親株挿植	芽付け 1月10日
挿植	1回 5月上旬
摘心	2回 5月下旬
挿植	7月5日頃
摘心	1回 7月25日頃
摘心	2回 8月10日(黄), 15日(白)
摘心	3回 8月25日(黄), 30日(白)
電照期	9月1日~10月1日
整枝	1回 8月17日(2本に)
追肥	2回 9月10日(200本)
追肥	3回 9月20日(180本)
追肥	4回 10月25日(150本)
追肥	1回 8月上旬
追肥	2回 8月中旬
追肥	3回 9月25日頃
ネット張り	9月中旬
下葉と	9月10日
ピニール	11月中下旬
摘開	12月上旬
摘開	11月上旬
摘開	11月上旬
摘開	12月下旬

注. 施肥はキク配合肥料(3.8:1.3:3.0) 塩加, 燐燐, 苦土石灰などを使用

経営の実態では忠見地区のキク栽培農家は全戸数の半に及び他地区に比して非常に多いが漸次周辺地区に新規栽培者が増加している。栽培規模別戸数は300~1,000m²が41.1%, 1,000~2,000m²が41.5%でほぼ同数に近い。栽培者の年齢層は若く, また後継者にも恵

較的栽培容易な暮出しに作型の統一を行なつた。また果菜育苗用の180cm角の障子の組立てハウスは安価で簡単に組立てられ, 規模拡大は容易である。(第2表)

2. 栽培概要

品種は他産地と異なり, 天ヶ原が90%以上に統一されている。暮出しでは天ヶ原は花首徒長により品質が劣るが, 八女は露地栽培し早目に電照をやめて花芽をすずめ, 花首徒長期に10~15°Cの低温で生育せしめて徒長させない栽培技術を確立した。

栽培の重点は栽培基準(第3表)に従い, (1)親株の厳選と確保 (2)床芽床消毒 (3)仕立て木数の統一制限 (4)止め肥時期 (5)消灯時期とハウスの被覆時期などを厳守している。

まれており将来の発展が予想される。1戸当りのハウス規模は1年目300m², 2年目には600~900m², 3年目には1,300m²位で, 以後は経営能力次第であり, 300m²当りの所要労力は85~89人と少ない。

III 八女市の電照ギク生産上の問題点

1. ハウス形態および輪作体系と連作障害

a. 2月出し栽培と鉄骨ハウスの導入

2月出しは防寒や耐雪性から鉄骨の希望が多いが, 気温的にみて2月出しは問題点が多い。しかし2, 3の形の鉄骨ハウスを試作し, 現在は当場の花き川ハウス形式で1,300m²余が試作されている。

b. 連作障害と作付け体系について

キクは2作以上の連作で無菌病には発育不良が目立ち立ち枯病などを多発する。八女は調査範囲では塩基の集積, 土壌酸度には問題が認められず病害虫防除に対策を必要とする。

現在, 対策は水田化, ハウス移動, 不使期用間のビニール除去および連作地は3作目にクロールピクリン消毒を行なつている。

輪作は後作として促成ギクと半促成果菜が多く, その後は水稲とする場合が多い。

2. 品種問題

天ヶ原が中心だが生産拡大や市場性から限度が考えられるので常に新品種の探求に努めており、目下、精興の華、インデアナ・ボリス系、プリンセス・アン系、金閣など試作をつづけている。

3. 八女市花き園芸組合としての問題

a. 生産の合理化

技術改善，商品性の増大（選花，品種統一）

b. 販売の合理化

共販の強化，規模の拡大，出荷調整その他

c. 直接的指導者層の強化

d. 2月出し栽培技術の確立とその経営的得失

IV 産地の強化，拡大のための諸施策

1. 栽培技術確立のための実用試験の推進

a. 電照の技術改善

i 交互電照試験と普及

ii 間欠的照明と Cyclic lighting の比較検討

討

iii 電照開始時期試験 などであり

一部はすでに実用化されて（約 60,000 m²）電力量半減と省力に役立つている。

b. 施肥改善の基礎調査

土壤調査，発育過程および養分含量の調査

c. 病害虫の防除対策

d. 栽培の省力化試験

i 除草剤利用の実用化

ii 土壤施用薬剤の実用化試験と展示

2. 行政施策

a. 新市場の調査，開拓

b. 生産性向上のための行政的指導

c. 花き経営合理化推進のための融資助成

本調査報告のとりまとめには八女市花き園芸組合，青木保組合長ほか役員一同，八女市役所農林課，桜木軍士技師，忠見農協指導部の各位に御援助と御協力を頂いた。記して厚く感謝する次第である。